

特  
集  
見  
聞

聞く！  
語る！

集中豪雨災害に学ぶ！

防府市に残された課題とは

平成21年7月、山口県を襲った未曾有の集中豪雨は  
予想もつかなかった規模の被害をもたらした

大きな人的被害も

梅雨前線の活発な活動により山口県で記録的な大雨が観測されたのは、平成21年7月21日。梅雨停滞前線の影響で降り続いていた雨が当日の早朝から激しくなった結果、県内の数カ所で土石流を起し、施設や住宅、車と、あらゆるものが巻き込まれる大惨事となりました。

気象庁は、7月21日の山口県付近でのこの豪雨および24日以降の九州北部での豪雨を総称して「平成21年7月中国・九州北部豪雨」と命名しました。山口県では、全壊33棟をふくむ住宅損壊が129棟、

床上709棟をふくむ住宅浸水が4、571棟を記録（内閣府発表／平成21年11月19日現在）。防府市真尾（まなお）の特別養護老人ホーム「ライフケア高砂」では、裏山がくずれて一階に流れ込み、入所者45名のうち7名が土砂に巻き込まれて亡くなったほか、同じく下

右田の国道262号付近で土石流により4名が死亡、真尾の大歳神社付近で山崩れにより2名が死亡するなど、県内の死者数は17名にのぼり、人的被害が甚大であったことが目立っています。

崖崩れや冠水による道路の被害も大きく、県内の国道・県道60カ所以上で全面通行止めなどの措置

が取られ、山口県萩市から防府市をむすぶ国道262号の仮復旧には一カ月半もかかるなど、幹線道路が寸断されて、生活に大きな影響を与えました。

今まで体験したことのない豪雨

「猛烈な雨」とは、大規模災害の危険性のある1時間に80ミリ以上の雨を指します（気象庁）。その発生回数は近年急増しており、全国の地域気象観測システム（アメダス）を分析したところ、1978年〜87年と98年〜2007年でほぼ倍増、また50ミリ以上の「非常に激しい雨」も、同じく1・5倍になっています。

その一因として、地球温暖化によって大気中の水蒸

気量が増えたことが挙げられています。刻々と変化する環境を考えれば、今後も、過去のデータにない自然災害が発生する可能性は大きいといえます。

鉄砲水により川があふれて自宅が濁流にのみ込まれそうになった、あるいは家に突然土石流が流れ込んだなどの被害を受けた人が口にするのも、「何十年来、こんなことは初めて」「この地域で、こんな被害が発生したことはない」という言葉でした。





土石流などの直接の被害ばかりでなく、その後も衣食住、あらゆる面での不便を余儀なくされる自然災害。事後のすみやかな復旧が重要なのももちろんですが、事前にできることはないのでしょうか。

災害時の避難指示や勧告の基準は自治体ごとに異なるため、情報提供の実際を把握するのは容易ではありません。防府市によれば、勧告、指示、準備情報を出す手順はこれまで地域防災計画に基づいて行っていたものの、具体的には不文律による慣習に頼っており、職員が危険箇所を

災害による経験を  
どう活かすか



現地で確認して、避難所や搬送手段などを確保してからの発令となっています。

いっぽう下関市では、気象庁の「土砂災害警戒判定メッシュ情報」に基づいて発令。市内の地図を5キロ四方単位で基盤目状に区切り、土砂災害の危険度を4段階に色分けして表示するシステムで、約2時間後にレベル3に到達することが予測されると「避難準備情報」、レベル3に達した時点で「避難勧告」を出すなど、基準は明確です。しかし今回、1万4千人に避難勧告を発令したにもかかわらず実際に避難したのは62人とどまっていたといい、今後の課題として広報手段の見直しを挙げます。

県内に大きな爪あとを残した「平成21年7月中国・九州北部豪雨」によって、行政側の災害警戒



区域への対策や避難発令システムの見直しが期待されるとともに、住民側にも、気象情報・危険情報・防災情報への感受さや、いざというときの自主避難の心づもり、近隣との互助意識などのそなえが必要となりそうです。

# 災害に対する予防の大切さ、 そしてその難しさを痛感

あの日、バケツをひっくり返したような雨が降り始めたとき、これまでまったく経験したことのない雨だと感じました。「こりゃあいけん、何か起こる」と思ったんです。本能的に危険を予知したというのでしょうか。

大雨のときに危険なのは土砂災害や河川の氾濫です。今回もあちこちでそれが起きたうえ、これまでにない規模だったから、防府市全体のことや、被害の大きかった「ライフケア高砂」の情報も、その時点ではさっぱり入りません。自分のいる場所だけで精一杯とい



山口県建設業協会 防府支部長  
中村建設株式会社 代表取締役社長 中村 明人さん

うのは、どこでも同じだったと思います。

県は災害を経験した担当者を各地に送っていきましたが、今回はいっぺんにあちこちで被害が出る状況だったからかなりの混乱があり、パニックだったといってもいいでしょう。県と市が管轄を分けての作業でうちの支部にも要請が入り、私は奈美地区に張りついて、夜10時半くらいまでは現場におったと思います。

被災時の建設業の仕事として、市や県の要請を受けての現場の復旧や維持管理が挙げられます。今回は特に、復旧作業を進めるにしても住民や作業員が移動できるようにするにしても、「とにかく生活の生命線である道路を真っ先に作らんと」ということを念頭に動きました。

当日は現場に着くのもひと苦勞。通り道には大きな丸太のような木が横たわつとる、道路自体も土砂に埋もれとるといふ状況です。奈美川のへりの道路ですから、道路

に濁流が氾濫して泥まみれ、見ている間に車が流れてくるようなことでした。

私は県の所長とタイアップし、現場で電話で受け答えしながら指示を出しておりました。手順としては、まず土嚢を並べて水をせき止めて、人が通れるように流れを調整します。それから重機で重い木を脇に戻すという作業です。

翌日からは奈美地区の維持にとめました。家々の畳の上はまだ土砂が上がっておったりしますから、畳や家具など、使えなくなつたものを道路まで持ち主が出し、そこからは市が回収するといった割り振りでした。

防府市は、平成3年の台風19号のときに大きな被害を受け、がれき等が出た苦い経験があります。それでも今回は台風災害とは感覚がまったく違う。その理由として、土砂災害の場合は、水がおさまるまで何も手につけられないことがあります。

ふり返つてみて、市内の危険箇所を把握して対策を練っておくのはもちろんですが、避難ルートはどうするかなど、地元の訓練も必要だと感じております。復旧にはボランティア活動も入りましたが、神戸の阪神淡路大震災での経験を持った人たちが、それを活かして予防の必要性を伝えておったようです。どちらにしろ、未経験の災害にそなえるということは非常に難しいと実感しました。

